知里幸恵の背景を探る －旧土人保護法成立以前のアイヌの人たち－

8月6日（金）13：30～15：00　東京会場
9月7日（火）19：00～20：30　札幌会場

講　師　富樫　利一　「知里真志保を語る会」会員・作家

きょうの話のテーマは、「知里幸恵の背景を探る」ということになっておりますけれども、本論は、旧土人保護法が成立する以前のアイヌの人たちについて話したいと思うのですよ。明治新政府ができてから旧土人保護法ができる以前のアイヌの人たちについては、ほとんど記録がないですよね。それで、わずかに残っている人たち、その人たちについて話していきたいと思います。

最初に、小さい方の資料を見て下さい。家の写真が出ていますね。これは愛隣学校、この説明書きが書かれています。これは「金成太郎を始めアイヌの努力によって設立された愛隣学校」、こういう学校が建っていましたよということですね、これはその証拠写真です。

それから、その下は、金成喜蔵以下5人の署名による幌別村旧土人学校設立の嘆願書です。明治15年10月のものです。最初に、嘆願書の趣意が書いてあって、そこに名前が書いてありますね。金成喜蔵って読めますね。志家吉蔵、志家芝九郎、盤運治、知里盤治、みんなアイヌの人の名前です。こういう人たちが連名で、アイヌの学校を建ててくれという請願書を出した証拠書類なんですね。

それから、次のページに行きます。この石碑は登別で見ることができます。

次に右側の写真ですが、これは、天皇より下付された千円の教育基金を使って学校設立を求めた金成太郎の直訴状なんです。これは金成太郎の、当時のアイヌの人の直筆だと思います。

それから、その下のものは、知里家に所蔵されていた金成太郎の小学校初等科教員免許候事という教員免許状です。金成太郎という人は、教員の免許をもらった人だということですね。これは、知里幸恵さんのお母さんや娘さん達が保管していまして、10年ぐらい前に私が最初に見せていただいたものです。

次のページ行きます。小さい字でごちゃごちゃごちゃって書いてますが、これは何かというと、これはジョン・バチェラーというキリスト教の宣教師と、もう一つは東大の学者であったチェンバレンという人が、金成喜蔵というアイヌの人が経営している宿屋に泊まったのですね。この人たちが泊まった時に、外国人が来たから泊まりましたよって役場に届けた文書ですね。

それから、その斜め下の方に縦書きで書いてある、ちょっと読めないような字は、これは何かというと、幌別の役場に金成太郎の呼出状です。治安裁判所という札幌からの裁判所が、金成太郎を呼び出したから、遅れないように届けてくれよという意味の治安裁判所からの呼出状なんですね。

それから、今度次のページ、難しい字が書いてあります。これは、金成太郎の直筆です。代筆しているんです。これ、何でここに載せたかというと、このことは、馬種を改良しなきゃならないので、馬を野放しにするなというようなことから、雄の馬はみんな金を抜きなさいという、去勢ですね、それに対して、金成太郎が、自分の父親の金成喜蔵と、志家吉蔵という人たちの代筆をしているわけです。ここに何で僕が載せたかというと、この字が金成太郎というアイヌの、日本の教育を受けた金成太郎の字が、うまいか下手かということは抜きにして、非常に達筆なので、私は最初全然読めなかったのですけれども、こういう字を書いたアイヌの人がいたということです。

それから、その下の方は、これは金成太郎が死んだ後に、当時の北門新報という新聞社が、金成太郎が死んだことについて、金成太郎何故死んだんだと呼びかけた追悼文なんですよ、これが新聞に出ているわけです。何回も出るんですよ、太郎、何で死んだんだ、太郎、何で死んだんだって。おまえが生きていればっていうね、こういう呼びかけが、親友、東大出身の伊東正三という人の新聞記事が残っているということですね。これがその資料です。

これからの話の証拠書類、証拠がここにありますよということです。

それからもう一つ、今度こっちの方、「知れる限りを」っていうのありますね、これは、登別市の市民向けの広報から写してきたのですけれども、最初のページ、「特集　知里幸恵生誕100年」ということで、去年、100年事業をやったわけです。知里幸恵さんについては、もう皆さん御承知だと思いますけれども、「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」という御存じの「アイヌ神謡集」を出したのです。生まれた登別市では、こういう人ですよっていう紹介したのですね、「登別の地に、生誕」、これは読んでもらえればわかります。

それから、次のページ行きます。知里幸恵はノートを残していますね。知里幸恵ノートという、これは知里森舎というグループから去年復刻版が出されました。

その下段は、知里幸恵は、大正11年9月18日に金田一京助のところで心臓麻痺で死んでしまうのですけれども、そのときに、死ぬ前に母親あてに手紙を書いています。この手紙が残っているわけですね。その手紙には、いろいろな

ことが書いてあるのです。私は一生登別で暮らします、暮らしたいと思いますというふうに書いてあるんです、ふるさとですからね。そしてそこで、もっと大事なことは、私は自分の生きていく道を見つけました、それはアイヌユーカラを文字に書き残すことです。それを、私の使命として受けとめましたといって、アイヌ語でアイヌユーカラを書き残すことが使命だと感じた、その間もなくに死んでしまうわけですね。それがこの手紙の中に書いてあるということです。

それから、知里幸恵の年譜がそこに書いてありますから、これも後でゆっくり読んでください。

それから、次のページは、「アイヌ神謡集」の有名な序文の一つが出ています。それから、そこの下に書いているのは横山むつみさんという人ですね、知里幸恵さんの姪に当たります。知里森舎というグループをつくって、ここでむつみさんたちは知里幸恵記念館の設立運動をやっています。今、ようやく全国から900万ぐらい集まったそうです。募金運動もやっていますので協力をお願いします。

それから、その横の方は、生誕記念の事業、こんなことをやりましたっていうことですね。アイヌの人で生誕100年のお祝いをこんなに盛大にされた人っていうのは、私の知っている限りでは幸恵さんぐらいです。まだ続いていて、ことしも何か講演があったりします。そういう知里幸恵さんのことについて詳しく話をするのは別の機会にして、私は、その知里幸恵さんが生まれる前の背景はどうだったのか。というのはなぜかというと、知里幸恵の話をされるときに、アイヌの歴史を抜きにして、アイヌの天才少女知里幸恵っていうことだけで議論されているきらいがあるんですよ。その前に何があったんだろうかっていうことを知りたい。その裏に何があったのかということがきょうの話の重点になってくると思います。

それからもう一つ3番目の資料をもとに話を進めていくわけですが、始める前に、私は、日本の、近代史というか、日本の歴史というか、そういうものをずっと大ざっぱに、本当に大ざっぱですけれども反省してみたいと思うのです。つまり、日本の歴史の中でアイヌ民族の歴史は、黙殺され続けてきたと言って過言ではないと思います。その結果、極めて少数の者、アイヌ民族もシャモも含めてなんですけれども、極めて少数の人しかアイヌ民族の歴史というものに興味や関心を持たなくなってきているのが現状でないでしょうか。今から10年ぐらい前はまだひどかったんですよ。最近はアイヌ文化振興法ができて、いろいろ勉強する機会がありますので、そういうのもだんだん薄れてきていると思いますけれども。

どんなふうにアイヌというのは語られてきたかというと、日本人社会の中で語られてきたアイヌというのは、北海道という辺境の地にあってね、たまたま観光相手で、熊を獲ってるとか何とかしている人たちだろうという事ですね。アイヌ民族という認め方ではなくて、アイヌの人間がいるということぐらいしか認識されてなかった。しかも、アイヌ民族というのは自然に消えていくだろうし、あるいは、消えていってしまった、もういないんだというような間違った観念が日本人の中に、あるいは日本人社会の中に、非常に広く植えつけられてきてしまっていた。

その大きな原因は何かというと、日本近代国家の成立の過程で、北海道開拓という大きな最重要課題の政策の中で、つまり、日本の御用学者や、あるいは御用研究者っていうかな、こういう人たちはアイヌ民族無視という差別を根幹としたその歴史教育の結果なわけであります。つまり、皇民化政策という大きな明治政府の政策はどんなことをやったかというと、アイヌの言語を奪い、文化を否定し、宗教も、生活習慣も一切無視してしまう。つまり、日本人の中に無理やりに入れてしまったわけです。日本の教育も明治になってから学校制度というものができるわけですけれども、その学校教育の中でも徹底的にアイヌの無視というものが続けられるわけです。それは国家ぐるみ、国家の政策の中で進めていくわけです。

そのことは、つまりアイヌ民族を無視するということは、全く歴史をゆがめていくということになるわけですが、それをあえて行っていったことは、結局何であったかというと、私は天皇を中心にした神話教育がまことしやかに行われて、日本人だけが神国、神の国、日本人だけが最優秀であって、アイヌや中国の人や朝鮮の人やアジアの人たちは差別されていくんだと、日本人だけが優秀であるというような、そういったものが根幹となって世界戦争へ入っていくわけですね。

戦後60年たったわけですけれども、その間、国際協調とか、あるいは国際交流とか、外国人と交流しましょうなんて言いながら、国内に抱えたアイヌ民族の問題については、やはり後ろを向いていたわけですね。最近になって、こういうふうに正面から話ができるようになってきたわけですね。それは、学校教育の中でも社会教育の中でも全く同じであったわけです。

そんな中で、1970年代に、民族自立の運動が起き上がるわけですね。例えば結城庄司という一人の青年がいるわけですけれども、彼は非常に激しい行動力と厳しい自分の論理によって立ち向かうわけです、闘いを宣言するわけですね。人間の歴史は真実を知る上で解放されなければならない、アイヌの専門家だとかアイヌの研究家っていうのは、どうしてそれを隠し続けて、日本人にもアイヌにも隠し続けてきたんだろうか、彼らの責任は非常に大きいんだっていうふうにして糾弾していくわけです。

しかし、1970年代の若いアイヌの青年たちの呼びかけの結果が、現在の、つまり、アイヌ文化振興法によって、今日、このような学習会が行われているわけですけれども、そのアイヌ文化振興法の成立の大きな要因になったことは全く否定できないと思います。

まだまだ、そのアイヌ文化振興法についてもいろんな問題を含んでいるという意見もあります。私もそう思う一人ですけれども、しかし現在のこの法律施行に基づいて、一歩ずつ進んでいることについて、非常にいいことでないかなと思っています。

実はきょう私もここに来て、何人ぐらいの人が話を聞きに来てくれるのかなと思っていました。恐らく1人か2人

でないかなと思ったんですけれども、こんなにたくさんの方が話を聞いてくれるので、非常に喜んでおります。

本論に入ります。明治以前、明治政府が成立するまでには、アイヌ民族の文化とか生活というのはまだ健在であったということをここで改めて知ってほしいんですよ。たしか松前藩は、アイヌにとって非常に限りない罪悪をし尽くしていました、奴隷化して、もうめちゃめちゃにしていました。しかし、アイヌが自分たちの言語を使ったり自分たちの信ずる神をお祈りする、そういうことは認めていました。しかし、それも明治、近代、日本の近代国家が成立するときには、根こそぎ奪われてしまったということを、頭の中に入れておいていただきたいと思います。

つまり、場所請負制度っていうのは、アイヌを奴隷的に支配したけれど、アイヌの風俗、習慣、言語をはじめとするアイヌの文化は独立していたのです。

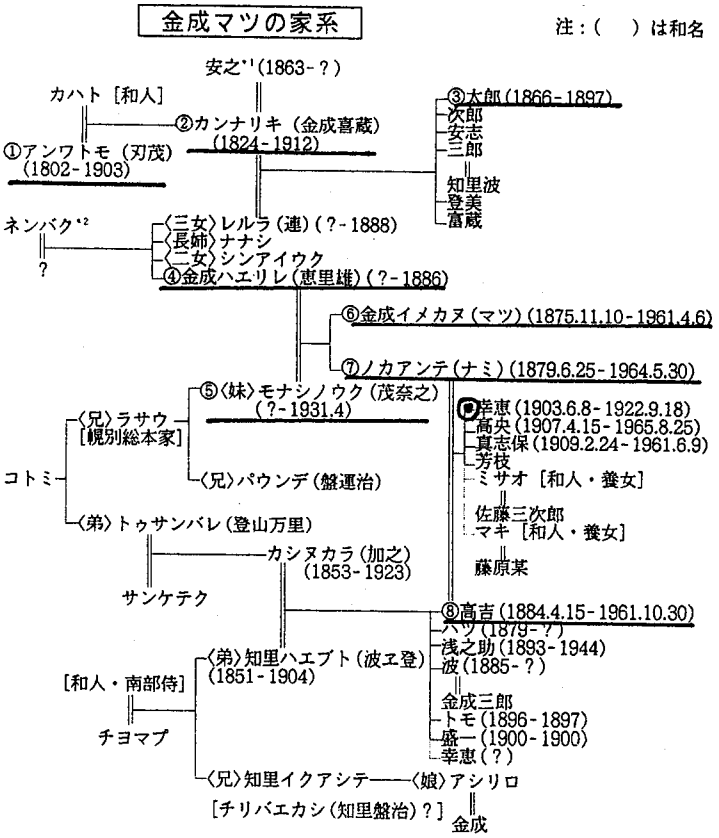
ところが、明治政府というのは、アイヌの言語、風俗、習慣を禁止し、狩猟、つまり自分たちの生活手段である狩猟も、あるいは山に入って採取することさえ禁じていたわけです。つまり、そのことが何を意味するかというと、アイヌは民族として生きていくことを否定されたわけです。そこに大量の日本人が移民してきます。それはアイヌにとっては、自分たちの土地に対する侵略であったというわけです。これは意識したかしないかは別として、歴史的にはそういうふうに見れると思うのです。

その明治政府が、新政府が成立して約32年後に、旧土人保護法というのが成立します。その旧土人保護法が成立するまでの約30年間の間がどうであったのかということがきょうのお話になっていくわけです。

アイヌの人たちは、北海道の、国家だとかアイヌ民族全部で国家としての意識は全くなくて、あちこちに住んでいたのだと思います。つまり、アイヌ民族全体としてどうかというような理論の整理はできていなかったわけです。そこに、例えば私の住んでいる登別には、戊辰戦争に負けた仙台藩の支藩である片倉藩が、今の白石市で生活することができなくなって、幌別に行って殿様を中心とした新しい国家、藩をつくろうということで、殿様ぐるみで入ってきたわけです。そして、家老だとかなんかを役職をいれて、すぐ役場をつくりました。片倉家の失業武士団が入植したことによって、その当時の記録が残されました。その記録の中にはアイヌの人たちとのやりとりなんかも残されているということです。これはさっきいろいろ書いたものです。

それから、もう一つは、明治18年には、イギリスからキリスト教が入ってきます。そのキリスト教の布教のためにやってきたジョン・バチェラーが、布教の結果を本国に報告するために送った手紙が残されています。そういった記録もあるということです。

それからもう一つ大事なことは、アイヌ自身の記録があるということです。つまり、金成太郎という人間の記録が出てくるわけですね。そういうことで、その当時に生きた人の生き様などを探すというのは、大変だった。だけれども、何とかこれをまとめたということで、この本論に入っていく。こっちの方に、知里幸恵の背景を探るっていうのに入っていきます。



79ページに系図が載せています。これは金成マツの家系ということになっています。そこに、いろんな人の名前が出てきます。これも大変なことなんですよ、実は。こういうものをつくるということ自体が。アイヌの人自体が文字がなかったわけですから、記録してないわけですよ。そのいろんな資料を集めてきて、これは蓮池悦子さんというアイヌ語の言語学を研究している人、金成マツのユーカラを日本語にかえていく研究をやっている人がつくったものなのですけれども、アイヌ民族は文字で記録しなかったものですから、家系についても口承なのですね。あれはどうのこうの、あそこはどうの、そういうことでやるから、家系図をつくるということは大変困難な作業だったと思うのですね。ですから、大変なことだと思うのですけれども、これでも完璧なものではないと思うのです。いろいろ伝承や生年月日だって、戸籍から確認していったわけでないですからね。

この中に丸で囲んだ番号ついています。①がアンワトモ、その下の②がカンナリキ、その下の③が金成太郎とありますね、この番号ついた人についてきょうお話しするわけです、どんなことをした人か。いいですか。ですから、これを横に置いて、これから話しするときに、ああ、この人だこの人だっていうふうに見ていただければわかると思うの

です。知里幸恵さんはどこにいるかというと、一番下の方に知里幸恵さんが出てくるわけです。ありますね、一番下の方に。括弧して知里幸恵って。クエスチョンマークついてありますね。この家系なんですね。

それでは、1番目のアンワトモっていう人の話、①アンワトモ。これは、明治4年11月、幌別郡土人人別調という中に名前が出てくるわけです。これはどういうことかというと、支配所、胆振国に幌別郡土人戸数兼人別調書っていうのを、片倉小十郎、殿様たちが来たときに、全部聞き取り調べたのですね。その記録の中に名前が出てくる人なんです。そのとき、明治3年に、69歳ですからおばあちゃんですね。その娘にアシコロっていう人がいるんですが、このアシコロっていう人はカンナリキの妹です。

おばあちゃんが、明治18年になってからなんですけれども、バチェラーは「わが人生の軌跡」という中で、パラピタとアシコロの養女キン、アンワトモおばあちゃんの孫になりますね。そのキンが、「毎日、小さな賛美歌《イエス我ヲ愛ス》を歌ってやるのです。それで今ではおばあさんが洗礼を受けたい、と言うようになったのです」というふうに書いてあるわけです。「彼女の髪は長く、まっ白で鼻が自分の膝のあたりまでくるほど腰が曲がっているのでした」と描写しています。つまり、当時、明治18年ですけれど、アイヌ語の賛美歌がもう歌われていたということです。

これはどうしてかというと、これは後から説明が出てくると思いますけれども、バチェラーが幌別にやってきたときに、英語を理解するアイヌの青年金成太郎と会って、7週間聖書の翻訳を続けたというふうに記録がありますから、恐らく彼と一緒につくった賛美歌だと思います。そこに、

ジョン・バチラーのアイヌ語による賛美歌

YESU EN OMAP	「イエス我ヲ愛ス」
1. Yesu kane en owap	「エス我ヲ愛ス
Kambi otta anuye	聖書ニ示ス
Yesu okirashinu nep	エス強ケレバ
ku shitona shomoki	我ハオソレズ」
Yesu en omap	※（折返し） 我を愛ス
Yesu en omap	我を愛ス
Yesu en omap	我を愛ス
2. Yesu ikawari ne	「エス我ヲ愛ス
Kamui otta yaiyange	神ニミササゲ
Ku ahun geshu ne na	我ヲ入ルタメニ
Kando apa maka na	天ノ門ヲ開き」
※（折返し）	
3. Yesu kor orushpe	「エス福音
Ku umbipka shomoki	我ハウタガワズ
Kani Yesu omap wa	我　エスヲ愛ス
Kando otta oman na	天ニゾノボラン」
※（折返し）	
Amen	アーメン

英人ジョン・バチュラー伝「異教の使徒」
仁多見巌著　道新選書より

ジョン・バチェラーのアイヌ語が書かれています。「YESU EN OMAP」、この一番最後の「Kando otta oman na」は天に行こうよ、ということです。

さあ、ここで問題は、天国というのは、キリスト教の言う天国だったのだろうかということです。キリスト教の天国は神のいるところです、バチェラーもそういうつもりでつくったと思うのですけれども、この80歳を過ぎたばあちゃんが、賛美歌聞いてすぐ、ああ、天国に行くよっていって、私も洗礼受けたいって言い出したんですね。じゃ、彼女、つまり、そのおばあちゃんの考えた天というのは何だったのだろうかということなんです。これを、「Kando」、アイヌの人にとって天国というのは、カムイのいるところです。カムイモシリですね、よく言いますね、カムイモシリ、人間のいるところはアイヌモシリで、死んだら行くところはポクナモシリです。ポクナモシリは、全く生きている人間の世界と逆の世界になっちゃうんです。全部逆さまになっています。

アイヌの人たちのカムイというのは、あらゆるものがカムイであって、キツネでもフクロウでも熊でも何でもカムイです。普段、たくさんのカムイたちはカムイモシリで、人間と同じ姿をして、お酒を飲んだり踊ったり歌ったりしてみんなここに暮らしていたんだそうです。そのカムイの国から人間の国へカムイが降りてくる時に、フクロウのカムイはフクロウの姿、熊のカムイは熊の姿になってあらわれてくるわけです。熊だとかフクロウの姿になったカムイは、人間に捕まえられるために降りてくるわけです。だから、カムイを一生懸命敬うわけです。知里幸恵さんのアイヌ神謡集の「銀の滴降る降るまはわりに」で始まるフクロウの神謡は、お話は、そういう話です。フクロウが降りてきて、人間に捕らえられて、そしてまた、昔、貧乏な家が金持ちになって、そしてまたこっちへ帰っていくよ、天に帰っていくんです、カムイは魂と肉体に分離されて、そしてアイヌの人たちにお祈りされてお酒を祭られて帰っていくわけです。天に帰ったフクロウは、みんなに教えるんですね。あそこのコタンに行ったら、すごいぞ、みんないいアイヌばかりだから、おまえ行ったら酒もごちそうしてくれるし、団子もごちそうしてくれるぞ、じゃ、おれも行くか、と今度はキツネが人間に捕らわれるために降りてくると、そういうカムイがたくさんいるところが天国なんです。

アイヌの人たちの考え。恐らくこのアンワトモというばあちゃんの天は、キリスト教が信じるような天ではなくて、自分たちが信じるカムイがたくさんいるところだと思ったと思うんです。だから、もし洗礼を受けたなら、行けるなら行くよっていう、もう80歳を過ぎたばあちゃんですからね、単純に考えたんではないかと思うんです。これは私の推測なんですけれど。

アンワトモのおばあちゃんのことをお話ししたのは、つまりキリスト教とアイヌ民族の宗教はどうだったのかということのはしりですね。後で述べますけれども、そういう意味で書きました。もう一つは、明治18年にアイヌ語はローマ字でもって表記されていたということですね。

それから、次、②のカンナリキに行きましょう。このカ

ンナリキというおじいちゃんはどんな人だったのか。

これは、アンワトモの息子です。一口に言って、金成喜蔵というのは、明治の幌別コタンの有力なアイヌです。つまり、財力があり人望があったわけですね。1898年、伊東正三が北門新報で「幌別の惨状旅人の談話」の中でカンナリキのことを次のように述べている。つまり、「喜蔵は七十有余にして性質正直にて、和人・同族の両者の間に勢力あり、徳望極めて高く、金成の言とし言へば首を傾けぬ者なしとか、アイヌに稀なる財産家にして、数多くの……」というふうに、非常に人格者だったのです。その彼は、先ほど資料に載せましたように、明治10年に、長男太郎、金成太郎を室蘭学校に入学させています。これは室蘭の常磐学校という学校ですけれども、アイヌの人で初めて日本の小学校に入ったわけです。

それから、明治15年に「幌別郡内土人学校設立の義ニ付嘆願書」を、先ほど言いましたように、幌別戸長本沢直養を経て、札幌県令、今の北海道の知事に5人の連名で学校を建ててくれっていう陳情書を出しています。

次のページ、82ページを見ましょう。そこに書いたのは、全文載せてないのですけれども、必要な方は、北海道アイヌ民族文化研究センターというところで整理されていますので、そこに行くとわかります。どんな趣意であったかというと、片倉家の日本人の子供とアイヌの子供を一緒に勉強させているけれども、どうしても一緒に勉強することを好まないと、だから、アイヌの子供たちだけの学校をつくりたいと、これが一つ。

それから、2番目には、校舎を建てるのは大変だから、今建っている草の小屋の横にもう一つ小屋をつくって、そこを教室とする。

3番目に、金成太郎を教員とすると。なぜ金成太郎を教員にするかというのは、後ほど太郎のところで説明します。

別冊には、いろんな、維持費がかかるけれども、それはアイヌの所得に応じて金を出すよという、細かいことまで書いてある請願書ですね。ただし、教員の太郎の給料は札幌県に見て欲しいということも書いてあります。なぜそんな、自分たちまで負担するよというぐらい自信があったのかというと、明治18年に幌別の人たちの納税記録があるのですが、役所の税金を納めたという記録です。それによると、アイヌの人が15人、片倉というのは和人で入ってきた人たちですね。それから、永住人というのは、その片倉が入ってくる前から住んでいた日本人の人たち、こういう人たちが11人ですね。つまり、開拓当初、アイヌの人と和人とが対等の生活をしていたのではないかと思われるのです。だから、自分たちの学校も自分たちで経営していけるという自信があったのだと思います。

それから、もう一つは、ジョン・バチェラーがキリスト教の布教の拠点を幌別コタンにしようとしたのですけれども、これは金成喜蔵が絶大な協力をしたと言われております。しかし、喜蔵は、ジョン・バチェラーの非常に強力な後援者でありながら、彼自身がキリスト教の洗礼を受けたのが非常に遅いのです。明治26年で、8年間も遅れているんです。このことは、自分で教会を建てたり金を出したりしながらも、自分がキリスト教の信者になるということには、やはりまだまだためらいがあったのではないかと思うのですね。

次はバチェラーの布教とアイヌの関係を考えてみましょう。

最初にバチェラーが登別に来た時には、バチェラーは宣教師の資格を持っていなかったんです。それから4年後にようやく宣教師の資格を受けています。明治18年に金成太郎は洗礼を受けていますが、その時はバチェラーが洗礼を授けたのではなくて、函館へ行って授けたとあります。バチェラーの最初の弟子はパンキペテロスという人です。物の本によっては、金成太郎がペテロスであるとされています。私もそれ信じて書いたんですけど、後で間違いだということがわかりました。ペテロスと金成太郎は別な人です。キリスト教聖公会の布教方針では、外国に布教しに行ったら、そこに住んでいる民族と同じ言語をもって布教しなさいということのようです。そのためバチラーは一生懸命アイヌ語を勉強して、アイヌ語で布教していくわけです。ですから、アイヌの人たちはみんなそこへなびいていったんだと思います。

同じイギリス人で医者であり考古学者であるニール・ゴードン・マンロー批判しています。そもそも信仰とは内なるものであって、外から何ものの力もこれを規制してはならない、アイヌ本来の神々を尊重し、内なる信仰をかりそめにも妨げてはいけないと言っております。

しかし、布教を目的とするキリスト教聖公会の方針としては、どんどんローマ字教育で聖書の教育をしたり、釧路の春採学校では、ローマ字の試験までやっております。これは釧路アイヌ文化懇話会というところのグループの研究で明らかになっています。

当時、知里幸恵さんの生まれたころは、アイヌでキリスト教の信者というのは、全道的に1,157名という記録がありますから、非常に数が増えていったのでしょう。しかし、数はふえたけれども、本当にキリスト教に心から帰依していたのかというと、ちょっとこれは疑問があります。

金成喜蔵は、非常に人格者でありながら、日本人の詐欺にかかっております、騙されちゃいますね。その騙された内容は84ページの上段に書いております。つまり、金成喜蔵は、金成太郎が、行方不明になってからなんですけれども、金成太郎っていうのは、当時2,000円もの財産を持っていたというのです、宿屋やったり店やったりなんかしたんですけれども。金成喜蔵は字読めないものですから、偽の書類をつかまされて、そこで無一文になってしまうのです。この辺から、コタンの崩壊というかな、それが始まっていったんだと思います。

このころから、幌別コタンからも、遠くサハリンの方まで漁業に、出稼ぎが始まります。84ページの下の方に行きましょう、下の方です、中段ですね。

知里幸恵の父と、それからアイヌの幌別コタンの人たちが50名ぐらいで、連名で請願を書いているわけですけれども、その請願の趣意書にこう書いてあります。今ではアイヌは出稼ぎに出るか和人に雇われるしか生きる道はなくなっ

た、この農事奨励会によって自立の道を探りたい。幌別村サマッキライバの土地を、団体を組織して、関係するからそこの土地を貸してほしいという請願を出しています。明治18年ごろまではアイヌも税金を納める、和人と同じぐらい納めるぐらいの対等の生活をしていたのですけれども、明治40年代になると、どんどんどんどん生活は破壊されていった。さらに、アイヌ民族の生活の破壊が行われていくわけですね。

さあ、それで一番最後、③の金成太郎。人別調書によればカンナリキのせがれセカチ5歳とあってそのときまだ名前がない。金成太郎というのはどういう男であったか。ある人は、研究者の中では、金成太郎というのは、明治政府の同化策の旗振り役をした男なんだと厳しく批判する人もいます。しかし、もう一回冷静に考えてみましょうね。つまり、圧倒的な勢いで海を渡って来る異文化と、目まぐるしく変わる社会的な条件の中で、生存する道さえも失われそうになったアイヌ民族は、確かに迷い、苦しみ、絶望の渦中の中にあったと思うのですね。その中で、何とか自分たちの生きる道を探ろうとして傷つき敗れていった金成太郎の生涯は、アイヌ史を語るときに極めて重いものがあると思うのです。

ところが、余り知られていないため、語られていないのです。それで、私はこの金成太郎を主人公にして、「エノン」という本を彩流社から10年ほど前に出しました。そうしたら、これは本多勝一氏から、「何で小説として書いたんだと、ちゃんと記録として書かないんだ」と言われましたが、記録は残っているのですけれども、ノンフィクションとして書くには余りにも少な過ぎるのです。記録と記録の間をつないでいくにはやっぱり小説の手法をとらざるを得ないのです、残念ながら。だけれども、これから述べるような非常にドラマチックな生涯が出てくるわけです。それを金成太郎の伝として、今年また彩流社から書き直して出したんです、それが「伏流」。

太郎について話ししましょう。明治10年、幌別で初めてアイヌ室蘭常磐学校に入ります。当時12歳ですね、1年生。明治10年5月ですね。それから、明治15年、札幌師範学校速成科に入ります。それから、明治16年には太郎は「旧土人ノ教育ノ費ヲ賜ヒ学校ヲ創立セラレン事ヲ請フノ書」という直訴状を札幌県令調所広丈あてに提出しています。

この年に、明治天皇が明治14年に北海道巡行のときに、アイヌの教育のために金を使いなさいって1,000円置いていくわけです。文部省も1,000円で何とかしなさいって置いていくわけですよ。しかし、今、アイヌの共有財産の裁判でも問題になっているところですが、この1,000円の使い道もどうなったのかということがよくわからない。そこで、その1,000円、せっかく明治天皇がくれたんだから、ちゃんと学校つくってくれよという陳情書を出すのですね。この陳情書は非常にぐさりと刺さる文面があるわけです。その真ん中の方に、「……太郎熟思熟考スルニ　夫　学校ハ何ノ為ニ設クルヤ　将ニ人倫ヲ明カニシ　風俗ヲ正シクセントスルナリ　孟子言ハズヤ……」って、孟子の言葉を使ってですね。これが太郎の考え方なんですね。なぜ差別するんだ、日本人も、アイヌもないじゃないか、何で同等の教育をしてくれないんだということを直訴しているわけなんです。この文章は見事な漢文の文章なのです。

それから、明治16年には、初等科教員免許を免許状を受けます。しかし、教員にならないのです。なった記録がないんです。いろいろまたその古文書がいっぱい出てきます。何で金成太郎を教員にしないんだという、その言いわけみたいなのを書いてある文書も残っています。金成太郎、教員の免許をもらったからといったって、たかがアイヌじゃないかと、そんなものに教育を、人の道を教える教育を任せるわけにいかないと、そういうことを書いた役所の役人の回答書もちゃんと残っています。つまり、はっきりとそこには差別が残っているわけですね。

金成太郎は、アイヌの学校をつくってくれと言ってもつくってくれない、それから自分も校長になれない、じゃ、自分で学校をつくろうというので、明治18年に彼は自分で学校をつくるんですよね。

86ページの最後の行、1885年、金成喜蔵宅で私塾が開かれる。金成喜蔵の家で、つまり、愛隣学校の前身である学校が開かれているわけですね、自分も教員の資格があるわけですから。父親はまだ金があったんです、当時ね。金成講義所という、教会を兼ねた教室をつくるわけです。1886年に、北海道土人会社規則というのを出します。つまり、農業と教育を主軸にした一つの会社をつくろうと。本社は幌別の幌別村に置き、目的は農業と教育、アイヌ1戸当たり土地2町歩の払い下げを受けて、アイヌの学校を建設し、資本金が15万円かかる、これは全国から義捐金を集めようと。あるいは、アイヌの教育会というものができて、これは和人の、当時の有力者たちが協力してくれるわけですね。その中に太郎が入っています。教育時論という当時の文書の中に、太郎が、どんな男か評価されています。「十八・九歳の間に過ぎざれど色黒く骨格たくましく、言語さわやかにして事理明白、アイヌの中の秀傑なるべし」。さらに上京して、黒田清隆、当時の内閣顧問、それから桜井地理局長、文部省ですね、アイヌ教育会はこういうふうにしたいんだという陳情をしているわけです。

次に、資料に愛隣学校の絵が出ていましたね、愛隣学校と金成太郎について話をします。

明治21年にバチェラーが開設したと言われている幌別の愛隣学校について金成太郎が大きくかかわっています。その時に出された開校届です「兼テ御許ノ相成居候　幌別村百三拾七番地私立相愛学校来ル廿五日開校仕候間」という文章です。その代表者が平民　金成太郎、代理が河田為助となって、北海道庁長官に4月20日に出されていますね、これには、伏線があって、いろんな宗教、キリスト教の教会や神社だとかお寺、北海道まだ何もなかったので各所でつくりたいのですが、明治政府はそれを、特に寺と神社についてきちっと整理してやりたかったのです。そういう中で、アイヌの学校、アイヌ学校というか、講義所というか、金成講義所をつくっている、これは何なのだという話になったから、届けを出さなければならなくなった、その通達に基づいて出したものだと思います。

それはいいのですけれども、次に校主変更之義とありますよ。これは明治21年8月25日です。校主を金成太郎から西東勇吾に変えますよということです。校主というのは校長です。ちょっと読んでみましょうか、「幌別郡幌別村百三拾七番地ニ設置致シ候私立相愛学校々主金成太郎義家事伺」、校主をやめて西東勇吾にかえますよと、校主を変更しますよという文章ですね。

次に88ページです。「開校式施工ニ付御臨席願」、学校をつくったから、次のページに行きます、88ページ行きます、本月十日午前十時より幌別村私立相愛学校開校式をしますので出席してくださいという案内状です。それに金成太郎の名前が出てくるのです、9月7日に。何でやめたはずなのになぜ出てきたんだ、やめさせられた後なのに。

次に、今度は校名変更なのです。幌別私立相愛学校、今般愛隣学校というふうに変更仕ります、そして校主は西東勇吾なのですね。

ですから、今までの、アイヌの歴史の中では、愛隣学校というのはバチェラーが建てましたと、みんなそう思っているのです、簡単にね。ところが、そんなに簡単なことではなかったと思うのです。

さらに、ここに書いていませんけれども、明治21年の7月か8月に、小金井良精という人知っています？医学博士、人類学博士、有名な人です。星新一のおじいちゃんです。この人がアイヌの人骨採集に来てるんですよ。アイヌの研究のために墓を全部暴いていくわけです。166体暴いていくんです。この人は、明治21年7月18日に豊平館で金成太郎と会っているんです。

それから、もう一つ、次は8月にさっき言いました金成太郎が、治安裁判所から呼出状来て、あなたのところの、幌別村の60番地に住んでいる金成太郎を呼び出すから、早く伝えてくれということなのです。アイヌ学校設立に情熱を燃やし、実現に手を貸しながら校主もかえられる、これ以後の太郎の消息は定かでなく、各地で講演をしている記録もあるが、アルコール中毒、大山師、後に片倉家移住顛末って、「日野愛喜」顛末記の中に出てくると思いますけれども、無頼の徒というふうに、とんでもないやつだという悪者にされてしまうわけですね。

このころ、ジョン・バチェラーは、英国聖公会、ＣＭＳに手紙を出しています。私たちの学校の校長という彼の地位から、解雇する、首にする人があります、金成太郎を、なぜかというと、強い酒を飲むようになりましたからというふうに、そこでバチェラーの手紙があるのですけれども、その辺が本当なのかどうかということは、全くそのころ、開校届、校名変更願、それから校主の変更、治安裁判所からの呼出状、つまり、小金井良精とアイヌ人骨のときに豊平館で会っているというのは、こういうようなことからして、果たして今までのような通説でいいのだろうか、太郎というのはどう身を処したのかというのを考え直していきたいと思います。

88ページ下の方、金成太郎と伊東正三と括弧のところありますけれども、ジャーナリスト伊東正三は北門新報の主筆であり、北門新報というのは中江兆民が出した最初の新聞なのですけれども、東京帝大中退で時の藩閥主流の体制を激しく批判した一人であるが、太郎の死を知って、死んでから、北門新報上に「金成太郎遂に逝けるか」、明治30年7月7日、8日と追悼文を書いているのですね。これは読んでみる必要があると思います。

ただ、このとき、太郎が国会議長あてに請願書を起草しているのです。それは、北海道でアイヌで一戸を構えている者すべてに調印させた、そして持っていくという意気込みだったらしいのですけれども、同族からも賛成を得なかったようですね。その請願書の原文が、この一番最後から2枚目に漢文で書かれた太郎の請願書というのがありますから、これは後でじっくり読んでください。

これは私が、登別市史編纂室に、ちょうど縁がありまして訪れた時、もう亡くなられたのですが市史編纂委員会の副委員長であった前川敏雄さんから昭和59年に聞いた話なのですけれど、太郎は毒殺されたと聞いていると、太郎の一番下の妹、知里ハナというのですけれども、その人が言ってたよと。これは太郎が死んでから生まれた人なのですけれども。金成家の中では、太郎については毒殺されたという風説が流れていると。それは、幌別の人、アイヌの人たちに太郎のことを聞いてもだれもしゃべらないのですよ。知らない知らないと、結局知らないことにしたのでしょうね、だと思うのです。ようやく最近日の目を見てきたんだと思うのですけどね。

つまり、存在していては困った、金成太郎は英語がしゃべれて、日本語を話せて、漢文をきちっと書けて、しかも堂々としていてしゃべるのもうまい、弁説さわやかで、そして行動力がある。当時それこそ船に乗って東京まで行って、内閣総理大臣顧問と会って直接話をするような男です。そして北海道のあちこちで演説して歩いているのです。そういう男は、いたら困る原因が何かあるわけです。

当時の状況はどうかというと、明治27年～28年の日清戦争、37年～38年の日露戦争があり、日本国政府としては、このうえ北海道でもし、アイヌが騒動を起こしたり、あるいは独立運動やデモなんかやるというようなことになっては大変だと思ったのではないかと思うのです。これは私の推測ですけれど。そうならないうちに、あるいはそういうことを先導するような有力な男は早く消してしまう必要があったのではないかと思うのです。私はそう思うのです。だから、一番私が引っかかったのは、毒殺されたと聞いているという風説なのです。

名前についてもちょっと、これもみんな御存じだと思うのですけれども、そのアイヌの人の名前というのは、生まれたときは、4、5歳まで名前つけないのだそうですね。名前つけてないのですけれども、だんだんその人の特徴や性格がわかるようになってきたころにつけているわけです。だから、太郎だって、最初に明治3年に人別調書を調べたときには、金成太郎の名前ないのです。セカチ。セカチってせがれ、男の子という意味です。5、6歳になって何ていう名前ついたんだろうかと一生懸命調べたんだけどわからない。今言うように、ハウエリレなんていうのは、ハウ、声ですから、声が高いという意味、声が高いという意味は

結局、ユーカラが上手だということですね。知里幸恵さんのおじいちゃんはそんな人だったんだということです。

モナシノウクという人と結婚するのですね。モナシノウクというのは知里幸恵のおばあちゃんになるわけですけれども、89ページの一番下の段にモナシノウクとありますね。この人は、人別調書ではカモエトラシの奥さんで、妻モナシノというふうになっております。ところが、このカモエトラシが死んでしまったので、ハウエリレと結婚したのです。この人は、ユーカラの名人と言われました。巫女の役目をして、吉凶を占う能力もあったと娘のマツは言っております。昭和33年の新聞インタビューに「私の祖先は文字を持っていませんでしたが、生活に必要なたくさんの知識を持っていました。私の母が夜空に輝く星を見て天災をぴたりと予言したのを今でも忘れません」なんていうふうに言っているように、そういう予知能力のあった人だと言われておりますね。

金田一京助が旭川を訪問して知里幸恵さんと、有名な出会いをするわけですけれども、金田一京助はなぜ旭川に行ったかというと、ジョン・バチェラーに勧められてこのモナシノウクおばあさんのユーカラを聞くために行ったのですね。これは有名な話しなのです。

このおばあちゃんは、ハウエリレとモナシノウクの間に金成マツという人、それから知里幸恵のお母さんであるナミという二人の娘が生まれるのですね。金成マツさんという人はどういう人かというと、15歳のときに事故でもって腰が動かなくなって、生涯松葉杖をついた人ですけれども、この人はユーカラの伝承者である金田一京助に92のユーカラ、8つのウェペケレ、13の歌謡、知里真志保に151のウェペケレ、6つのユーカラ、58の歌謡を残した、つまり、全部アイヌ語でローマ字表記をして大学ノート2万ページにも及ぶ記録を残した人なのですね。洗礼名はマリヤ。

次、91ページの7人目の人に行きましょう。アイヌ語の名前はノカアンテで、知里幸恵のお母さん、ナミさんです。このナミさんは、つまり、知里幸恵、知里高央、知里真志保、高央というのは知里幸恵さんの弟さんですけれども、この人は小樽商大出て最後は江差高校の英語の先生で亡くなりましたし、そして真志保さんというのは東大を出て北大の教授までなった人ですね。こういう非常に優秀な人たちを生んだ人なのですね。

次92ページ行きます、時間がありませんので、飛ばして行きます。

知里幸恵さんのお父さんは高吉という人です。この高吉さんは、金成ナミさんと結婚して、さっき言った3人の優秀な子供を産むわけですけれど、この人たちが生きたころは大変だったとのではないか思います。

93ページの方に行きます。明治30年ごろ、旧土人保護法が成立する2、3年前から、コタンの長老金成喜蔵の財産が奪われます。そして、民族自立に燃えた太郎が死にます、旧土人保護法が施行されたころ、アイヌの人たちの生活は自立不能な状態になっていくわけです。出稼ぎ、天候不良による農業不能と漁場、船揚場の和人の独占、農業を志した者もこの地方独特の農作物の開花期の海霧（「海霧」と書いて「じり」と言います）によって、何もできないのですよ、農作物。ダイコンぐらいしかできないのです。開拓に入った片倉一族でさえ、農業に見切りをつけてふるさと白石に帰ったり、あるいは札幌の手稲、白石へ移ったりしていくわけです。

そのころの状態が登別市役所の保管文書の中にあるのですけれども、旧土人保護の件という文章があります。貧困程度調査表として、水害による土地の流出、不作、病気等の理由により、種子給与願を出している者、に、明治10年代に和人と対等に納税をしていたコタンの有力者たち、金成喜蔵の妻、安志、知里芝四郎、志家喜平、ウノカレ等、これらみんなの名前が全部畑が全部だめになった。アイヌが耕した土地はどんどんなくなっていきますね。

それから、施療券御下附願、つまり、病気になった者も医者に行けませんよと。ただでさえ39年には赤痢が大流行し、もうばたばた死んでいくわけですね。救助米、薬価の給与が行われたとも書かれています。そして、さらに旅人は死ぬし、救済の予算が全く不足しているという文章も残っています。幸恵が生まれ育ったころは、幌別のアイヌのコタンの人たちは惨憺たるものだったのですね。もうわずかな土地は流され、種もなく、食う米も、病人の治療代もなかった時代なのですね。だから、知里幸恵は、金成マツがキリスト教のバイブルウーマン、聖書の研究員として旭川に行ったときについて行ったんだというふうに書いていますけれども、口減らしですよ、一人でも口減らししなければならなかったのではないかと思うのです。

だから、当時、明治32年に旧土人保護法が成立して、アイヌに土地を5町分ずつあげるというふうにやるわけですね。これは個人なのですよ、個人で農業を希望する者に

与えるのですけれども、明治45年に幌別の場合は団体をつくって、全部で50人で、サマッキライバという川があるのですけれども、その両岸全部の大きい土地を全部、みんなで農地開拓をやるからという請願を出すのですけれども、それは認められなかったようです。

そういうようなことがありましたが、知里幸恵というのはユーカラをローマ字でアイヌ語を表現して日本語訳をつけたという有名な人なのですけれども、どうも知里幸恵が天才であって、知里幸恵だけがローマ字で表記したというふうにみんな認識していると思うのですけれども、そうでなくて、幌別では今話ししましたように、たくさんの人たちがローマ字を勉強したということなのです。その上に立って、彼女がローマ字表記が抵抗なく、すっと入っていけたのだと思うのです。

ここで、94ページの下の方、文献上に出てくるものでは、例えば金成太郎とバチェラーによってアイヌ語の読み書きをやりましたというバチェラーの記録や、それから、18年から21年にかけて、バチェラーはキリスト教の教義書の一部をローマ字、アイヌ語翻訳をしたとか、それから、幌別出身のペテロス、シヌレツキ、トノレツキ、トウベ等というのは、ローマ字の指導のために釧路まで行ってアイヌ語のローマ字教育をしたとか、32年から33年の間は、金成講義所という金成喜蔵が建てた講堂でローマ字教育が行われ

たとか、その他、函館へ行った無江長吉、志家富太郎、知里清太郎、登山勘治などもみんなローマ字をそこで勉強してきたし、釧路のペインというキリスト教の指導者は、聖書教育はローマ字であったと、秀二郎というのは、長久保秀二郎という春採学校の校長さんにもローマ字を毎日勉強させよというふうに強い指導をしたとも言われております。

私が調査したものでは、「喜平さんの弟なんかは若くして死んだけど、バチェラーの学校に行った出来物で外国船が難破して二人の外人が幌別の浜に上がったときには通訳したよと」、つまり、英語ができたアイヌが存在したことを横山スイさんの話を結城庄司が採録したものもあるし、わしの孫じいさんは英語の字で手紙を書いていたよというおばあちゃんもいました。英語の字というのは、ローマ字です。多くの人がローマ字を学んでいたということです。

私は知里幸恵さんの全く大ファンで、すごいと思うのですけれども、余り知里幸恵さんを神格化しちゃうことを恐れている。知里幸恵さんだけがローマ字ができたんだと評価がされている向きがあるので、そうじゃないよということね。これはきちっと押さえていきたいと思いますね。

もう一つ、知里幸恵のことについて話したいのですけれども、神謡集の序文の読み方なのですけれども、確かに、亡びゆくものと書いている部分ですけれども、よく読むと、その行間の中からは、ちゃんと民族復興の強い願いが読みとれるわけです。だから、95ページの一番最後の行、「今の私たちの中からも、いつからは、二人三人でも強いものが出てきたら、進みゆく世と歩をならべる日も、やがては来ませう。それはほんたうに私たちの切なる望み、明暮祈ってゐる事でございます。」、民族復興の日が来ることの切なる願いや、亡びゆく弱き者とあるのだけれども、しかし、そうであってはいけないのだという彼女の切実な決意の読み取りというものを行間の中から読んでいかなければならないと思うのです。そして、最初に言いましたけれども、「私にしかできないある大きな使命をあたえられていることを痛切に感じました。それは、愛する同朋が過去幾千年の間に残し伝えた文芸を残すことです。この仕事は私にとってもっともふさわしい尊い仕業なのですから」と彼女は死の直前の手紙のなかで言っているのです。

この話しをしたらまた怒られるのですけれども、金田一京助は知里幸恵に強く接触していきますけれども、彼の最初の研究の起点は、アイヌ語の文化を残すということではなかったのですね。つまり、日本語というのはどうあるべきか、日本文化のための最初、日本文字とか日本言語とかとアイヌ語との比較から始まっていくわけですから、そういう考えでいるわけですから。だから、金田一はアイヌは亡びるだろうということをあちこちで言っているのです。知里幸恵は書き残した一冊の本で、そうじゃなくて、そういう金田一やあるいは日本の研究者たちに、アイヌは亡びないよと、言語がなくなったらその民族は亡びると言われているけれども、亡びないよということを高らかに宣言したのではないかと思うのです。知里幸恵のアイヌ宣言であったと考えます。

私は、「銀のしずく思いのまま」という本を出しているのですけれども、今までお話ししたのは、その背景を探る部分なのです。その前の部分は、日誌なのですよ、知里幸恵が東京で金田一のもとで過ごした日記なのですね、有名な日記なのですけれども、その日記の解説をしているわけです。

そういうことで、知里幸恵について、どう思っているのかということをアイヌの人に聞いたことあるのですよ。アイヌの民族の自立復興運動の先頭に立っている人に知里幸恵をどう思うのと聞いたら、「知里幸恵は自分から亡国の民と書いているじゃないか」という言い方の人。それから、アイヌ語の勉強をしている婦人に聞きました、「詩人でしょう」という簡単な評価ね。それから、アイヌの婦人に、幸恵さんのこと聞いたことあるかいって聞いたら、「東京に妾に行った人かい」というのですよ。つまり、どういうことかというと、幸恵について、日本人もアイヌの人も、きちんと知らされていなかったし、知っていなかったということです。これは一番最初に言いましたように、日本の教育の中で、そういったものをみんな黙殺した結果なのです。今こうやって、私はもう5年ぐらい前からこの知里幸恵のことについてあちこちで話をして歩いているのですけれども、「初めてわかりました」とかね、「目からうろこがとれました」という人が多いです。

つまり、言語があれば民族は亡びずという一つの鉄則に、幸恵は、意識したかしないかは別にして、私もうこれでアイヌとしてアイヌ語を書いていきますって死んじゃったのです。そう決意して、彼女は死んでいきましたが、知里幸恵が灯した灯火って、非常に小さなものであったけれども、今我々の間に、かすかに、こうこうと光り輝き出してきているのでないかと思うのです。本当に金田一のところで過ごした2月間の間の日誌というのは、まことに切実、まじめな女性だったようです。彼女自身キリスト教を信じながら、しかも和人のキリストに対するだらしなさを非常に怒りを持っていたようです。そんなようなものも勉強になるのでないかと思います。

まとまりのない話をしましたが、そんなことで私の話は終わりたいと思います。(拍手)

〔司会〕　何か御質問ございますでしょうか。

〔質問〕　この銀の滴のアイヌ語の研究をしている者なのですけれども、アイヌ語のコミュニティー、アイヌ語を第1言語としたときに、コミュニティーというのが、いつごろまでどこで残っていたのかということをお伺いしたいと思います。

〔富樫〕　よくわからないですね。幸恵さんがアイヌ語で書きとめることができたのは、おばあちゃんと一緒に、モナシノウクさんというおばあちゃん、ほとんどアイヌ語しかしゃべれないおばあちゃんですけどね、その方と一緒にいたからアイヌ語も日本語もしゃべるようになったと思うのです。答えになるかどうかわかりませんけれども、北海道の平取に黒川伝造さんという人がいます。黒川さんは、小学校4年のときに悪性のトラホーマにかかっ

て、目が不自由になってしまいました。そのため学校へ行っても字見えない、勉強がわからない、そして、先生に怒られるからと学校に行きたくなくなった、そして家にいると、家にはおばあちゃんがいて、おばあちゃんたちは集まってユーカラしゃべる、それが自然に耳に入って覚えたんだろうと。だけどアイヌ語というのはしゃべってはならないものだと思っていたので、アイヌ語は話していなかったのです。それが、大きくなってから観光相手の観光写真のモデルになったのですけれども、そのときに、日本人のお客さんから、アイヌだったらアイヌ語しゃべってみろと言われ、かっとなって、しゃべろうと思ったらアイヌ語が出てきたんだそうです。幼いときに聞いていた言葉が残っていてちゃんとしゃべるようになった。今は、神様へのお祈りもちゃんとアイヌ語でできるそうです。昭和4年生まれというから、私と余り変わら方です。そういうところでは確かにアイヌ語が残っていたのでないかと思うのですけれども。ただ幸恵さんの場合は、そういう特殊な環境というか、いい環境にあったということです。

〔質問〕　もう100年前のことですからね、なかなかこれらの調査といっても限界があると思うのですけれども、私もそんなに幸恵さんのたくさん読んでいるわけでないですけれども、藤本さんの本に詳しく書いてあるのですよね。ただ、19歳と3カ月ですか、幸恵さん亡くなってますので、20年足らずですから、余り記録された内容も、100年のこの時間の中で薄れているのだろうと思うのですよ。ただ、あれだけの才能といいますか、アイヌ民族の伝統的な中で神髄といいますか、序文なんか見ても本当に感動するわけですね。しかし、私ちょっと気になるところは、金田一さんとの関係が、何かあるように言われたように、何かちょっと残念なようなこと、生身の人間ですからね、そういったこともあるのかどうかというか、それだけが、本当は親とかおばあちゃん、あの関係も今後まだ、その真実といいますか、リアルにその状況が、富樫先生なんかもその一人だと思うのですが、もう少し深めて、実態を、あと若いとき恋人みたいな人いましたよね、そういったものもありまして、若いだけに、ちょっと人間的な愛情の関係が、親とか、子供でも残されたらよかったのに、これはもう不可能なことですので、変な話ですけれども、そういうふうに思うのですよね。

〔富樫〕　簡単に答えます。金田一と知里幸恵さんの男と女の関係があったのではないかというのは、藤本英夫さんが書くものですから怪しくなっちゃったので、そんなことはなかったと思います。というのは、熱烈なクリスチャンですから、幸恵さんはね、そういうことはなかったと思います。

それから、「銀の滴降る降るまはわりに、金の滴降る降るまはわりに」という、余りにも日本語が美しいから、ノートと違うのです、翻訳の仕方が。幸恵さんのノートには、「あたりに降るふる銀の水」だったかな、それを「銀のしずく降るふるまわりに」きれいに書いたので、金田一が手を加えたのでないかという人もいるのですけれども、しかし、私が調べた結果、銀の滴という言葉は幸恵さんの日記の中に出てくるのです、さっき言ってました銀の滴、緑の滴とだから、全くそれはね、金田一創作ではないと思いますね。

それで、男と女の関係については、何であの人があんなところを書いたかわからないのですけれども、それはなかったと思います。

あとその調べる資料が全くないのですよ、方法が。金田一というのは非常に立派な大先生なんだけど、幸恵さんのことを書くとき、きれいな言葉で、美辞麗句ですね、つまり、美文調で育った人だからきれいに書くからね。どこか別なところに行くと、アイヌの同化策が見事に行われたんだとかってね、これは日本人は誇ってもいいなと、書いたりアイヌは亡びる民族などと書いている。それを読むと非常に驚くのですね。この人はアイヌをいや幸恵を利用しただけなのか。って疑問がわいてきますよ。金田一の業績は業績として評価はしてもですね。金田一のことを悪く余り言うなって言われているんですね、幸恵さんの評価が下がるからと言われているんだけど、事実は事実ですね。

これ以上幸恵さんに関することの追求は限界かもしれません。残っている資料からも、もう不可能かもしれない。たった20年の短い人生でしたからね。アイヌ民族のなかで文字表記として記録が残っていることは貴重な財産ですね。

〔司会〕　ありがとうございました。それでは、時間になりましたので、これで終わらせていただきたいと思います。本当にありがとうございました。（拍手）

〔富樫〕　どうもありがとうございました。

付記　講義の資料　銀のしずく「思いのまま」知里幸恵の遺稿より（彩流社）